

しかし、余りのもつたいなさで、そうして余りのなつかしさと念が高じたために、とうとう、驚いて夢からさめてしまったのであるが、夢からさめた・・・その一せつなに

あッ！お母さんがいらしたのに！

お父さんがいらしたのに！

と思いながら、あふれ落ちる涙と共に、まのあたりの両親のまぼろしに追いすがろうとした心持は、とうてい、忘却することが出来ないのである！！

速記界の振、不振は国運の隆盛に重大なる関係を有する！

「速記学の樹立！」 「速記文字の民衆化！」 「速記報国！」

という標語の前には、忽ちにして若き血潮の燃え立つのを覚えながらも、こうして一面には、夢になつかしい父母に会ってその御護りを受けつつ、とうとう産声を挙げて行くこととなったこの書は、いうまでもなく、実にわたくし自身の真実なるあらわれである。

ことに、その中でも取り分け「識者に檄す！」という次の一文に至っては、速記界の不振を慨する一片の真情をひれきし、最も心血を注げるものであって、実に、速記文字に對するわたくしの根本精神を述べたものである。数年前、ある大新聞に発表しようと思つて、この種のものを書くことがあつた時、たわむれて「自分の遺言状」であるなどと口走つたことを追憶しておるが、今こうして書き終わって見ると、如